

# 堀河百首雑の歌題覚え書

内藤 愛子

堀河百首題は勅撰集の歌題・歌合の歌題とされず、歌題として定着されていない歌題が多数をしめていることは周知のことであり、殊に、恋・雑の歌題のほとんどが歌題としてみえない歌題といえよう。今回は、堀河百首の雑の歌題を取り上げて考察を加えてみることにする。

堀河百首の雑の歌題は「晝」「松」「竹」「苔」「鶴」「山」「河」「野」「関」「橋」「海路」「旅」「別」「山家」「田家」「懐旧」「夢」「無常」「述懐」「祝」の二十歌題である。これらは四季の歌題と同様に具象的詠物題の他に「懐旧」「夢」「無常」「述懐」「祝」等の抽象的な歌題が含まれている。また、これら雑の歌題は『和漢朗詠集』の歌題や『古今六帖』の分類にみられるのみである。特に、先学者の方々<sup>(註1)</sup>が指摘されているように『和漢朗詠集』の歌題と一致する歌題が多数みられることから『和漢朗詠集』との関係の深さが指摘されている。

『和漢朗詠集』と一致する歌題としては「晝」「松」「竹」「鶴」「山」「山家」「田家」「懐旧」「無常」「述懐」「祝」の十一歌題に及び、類似している歌題としては「旅」「別」の二歌題である。また、

一致しない歌題としては「苔」「河」「野」「関」「橋」「海路」「夢」の七歌題にすぎず、雑の歌題の選択形成において『和漢朗詠集』とのなんらかの関係を確認しない訳にはいかない。このように、堀河百首題の雑の歌題の源泉を『和漢朗詠集』に求めるならば『和漢朗詠集』の歌題と一致しない歌題はどのような選択意識に拠ったのであろうか。

それを知るための一段階として、堀河百首は題詠が不可欠な要素であるから、『和漢朗詠集』と一致しない歌題を歌人達がどのようにとらえているかを調査することに拠ってその歌題の選択意識を知る手がかりになるだろう。

まず、『和漢朗詠集』と一致しない「苔」「河」「野」「関」「橋」「海路」「夢」の七歌題を調べてみると、これら七歌題のうち「苔」「夢」の二歌題を除いた五歌題に共通な傾向が指摘される。それは、いずれの歌題も歌枕及び地名を詠み込んだ詠歌が多数をしめているということである。

因みに、雑の歌題において歌枕及び地名を詠み入れた詠歌数を歌題別に整理してみると次のようである。

歌題	詠歌数	歌題	詠歌数	歌題	詠歌数	歌題	詠歌数
眺	0	山	11	海路	10	懐旧	4
松	8	河	15	旅	5	夢	0
竹	0	野	13	別	2	無常	2
苔	4	関	14	山家	0	述懐	1
鶴	7	橋	13	田家	0	祝	4

このように「眺」「竹」「山家」「田家」「夢」等のように歌枕や名所を詠み入れた歌がない歌題であり、「山」「河」「野」「関」「橋」「海路」のように歌枕や地名に拠った詠歌が十首以上みられる歌題がある。歌枕に拠った詠歌が多い歌題の「山」以外の歌題は『和漢朗詠集』と一致しない歌題である。しかも、堀河百首の雑の歌題配列からみると、それら六歌題が集中している。そのことからすると意識的な配列構成がなされていると推察することができる。

今回はその六歌題を取り上げて私見を述べてみたい。まずは、これらの歌題の歌枕地名を上げてみると次のようである。

山は、葛城山・妹背山・佐夜の中山・越の尾山・富士の柴山・小泊瀬の山・荒山・筑波山・黒髪山・真弓山・足柄山(11)である。河は、穴師川・楡隈川・鈴香川・隅田川・境川・美奈瀬川・三輪川・大井川・桂川・阿武隈川・水無川・大川・音羽川・見馴川(14)である。野は、小野・入野・宮城野・あけ野の原・嵯峨・武蔵野・猪名伏原・岩手野・粟津野・布留野(11)である。関は、相坂の関・須磨の関・清見ヶ関・砺波の関・勿来の関・白川の関・衣の関・川口の関(8)である。橋は、板倉の橋・瀬田の橋・浜名の橋・佐野

の舟橋・真野の継橋・小墾田の板田の橋・宇治橋・布留野沢・八橋・木曾路の橋(10)である。海路は、武庫浦・淡路の瀬戸・伊良湖崎・淡路嶋絵島ヶ磯・猪名野の沖・求塚・奈呉の浦・由良の門・大嶋・天の橋立(10)である。

このように、いずれの歌題も歌枕の種類が多く詠まれている傾向が捉えられる。殊に、「山」と「海路」の歌題は同様の歌枕に拠った詠歌がみられず、少なからず、これら六歌題において歌枕地名への強い関心が窺える。

次に、各歌題ごとに具体的に歌枕地名を検討してみたい。この六歌題のうち、「橋」に関しては拙稿で触れているので今回は省くことにする。

#### △山▽

勅撰集の雑においては歌題としてみえず、主題として山は『拾遺集』以来みられる。

堀河百首においての歌枕、地名は葛城山(1361)・妹背山(1363)・佐夜中山(1364)・越の尾山(1365)・富士の柴山(1366)・小泊瀬の山(1367)・荒山(1369)・筑波山(1370)・黒髪山(1373)・真弓山(1375)・足柄山(1376)である。そのうち、葛城山・妹背山・小泊瀬山・荒山・筑波山・黒髪山・足柄山は『万葉集』に詠まれているものである。また、越の尾山・富士の柴山・荒山・黒髪山・真弓山・足柄山は堀河百首以前の勅撰集にはみられない地名で、それらが半数以上をしめている。

そのうち、荒山と真弓山は『平安和歌歌枕地名索引』に各々その歌一首のみが上げられている。

1369 うはそくは行ひすらしまきの立あら山中にまふしさしつ

1375 引つれてまとのせんとやおもふとち春はまゆみの山に入らん

1369 荒山は『八雲御抄』に豊前とあるが、地名ではなく、単に、

荒れたる山と解釈が可能である。『万葉集』において荒山を詠み入れた歌(241・1806・3805)がみられ、地名と解釈もできなくはない。荒山は勅撰集にみえず、『万葉集』のみに詠歌がみられる点からすれば少なからず出典は『万葉集』と言つてよいように思われる。

1375の真弓山は類歌がなく新奇な歌枕と捉えられるが、真弓の生い茂る山と解釈することも可能であろう。真弓山は典拠が判明しないが万葉風な詠歌に仕立て上げられている。

1365の越の尾山が詠まれた歌はこの頭季の歌と帥中納言俊忠集13(『私家集大成中古II』)にみえるのみである。そして、その家集において堀河百首の詠出歌人達との贈答歌がみられ、俊忠と歌人達との交流関係が認められることから、越の尾山はある共通の基盤に拠つて詠まれた歌枕と捉えられるが、少なくとも当時代には詠まれていたものと推察される。また、越の尾山は歌学書類に見られないが『五代集歌枕』において越の大山―越中とあり、『万葉集』3153に詠歌がみられることから越の大山と混淆したと推測ができるだろう。

1365 嶺たかきこしの尾山にいる人はしは車にてくたる也けり

13 おほつかなこしのをやまのしゐしはのあをほもみへすつもる

#### しら雪

このように、勅撰集にみえない歌枕地名もやはり『万葉集』との関係がみられ、そこに典拠を求められているということができよう。

黒髪山は『万葉集』に詠まれた地名で、1373では黒髪の掛詞であり、白髪と対照語として用いている。このような歌枕に拠つた技巧的な詠歌はこの一首のみである。

1373 むは玉の黒髪山のいたゞきに雪もつもらはしらかとやみん

「山」においての歌枕地名は『万葉集』を典拠としていていると思われ、そのものが多数を占めていると言える。

#### △河▽

河を主題とした詠歌が勅撰集の雑の主題として『古今集』以来みられ、歌枕が詠み込まれた歌は『拾遺集』雑上よりみられる。

堀河百首の「河」で、歌枕、地名の使用した詠歌は十六首中十五首に及び、ほとんどが詠まれている。歌枕・地名は穴師川(1377)檜限川(1378)鈴香川(1379)隅田川(1380)境川(1381)美奈瀬川(1382)三輪川(1383)大井川(1384)桂川(1385)阿武隈川(1386・1388)水無川(1387)大川(1389)音羽川(1391)見馴川(1392)である。

このうち、掛詞・縁語等として地名を用いた修辞技巧がみられる詠歌は次の五首である。

1379 わきかへり岩こす波のたかければ山ひひかせる鈴香川かな

1386 名にしおはゝあふくま川を渡りみん恋しき人の影やうつると

1388 濡きめといふにつけてや流れけんあふくま川のなこそ惜けれ

1391 波たかく音にきゝつる音羽川けにすぎまうき渡り也けり

1392 いそけともわたりやられぬみなれ川見馴し人の影やともると

1378 は鈴香川に鈴を掛け、「響く」を縁語として引いている。1386・

1388 はいずれも阿武隈川に「あふ」を掛けた人事詠である。1391は音羽川の音と々音にきく音を重ねる技巧がみえる。1391の見馴川は見馴しを引くために用いられている。

堀河百首成立以前の勅撰集にみえない歌枕地名は穴師川・檜限川

・鈴香川・隅田川・境川・美奈瀬川・三輪川・桂川・大川・見馴川

と多くみられ、そのうち、『万葉集』にある歌枕地名は穴師川・檜

限川・鈴香川・美奈瀬川が上げられる。また『万葉集』を発想の典

拠とした詠歌は1378・1382の二首である。

1378 今よりひのくま川に駒とめしかしらの雪のかけうつりけり

1378 は直接『万葉集』3097を引いたかは疑問だが、3097は『古今集』1080

や『源氏物語』の葵・椎が本に引歌されており、駒をとめるという意を導いている。それらの発想を典拠として詠まれたと思われる。

3097 さひのくま檜隈川に馬とどめ馬に水かへ我よそに見む

1382 かまくらやみこしかたけに雪消てみなの瀬川に水まさるなり

1382 『万葉集』3366を本歌とした詠歌であり、美奈瀬川が詠まれた歌は『平安和歌歌枕地名索引』にはこの歌のみである。また、1381の境川も同様にこの歌のみで、境川は新しい歌枕、地名と言えよう。

1381 3366 ま愛しみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか  
舟もなく岩波たかきさかひ川水まさりなは人もかよはし

このように、河でもやはり、『万葉集』に典拠を求められる歌枕地名が目に付き、地名歌枕に寄せた修辭技巧もみられる。

### 〈野〉

野を主題とした詠歌が勅撰集の雑の主題にはなく、『拾遺集』雑下に安達ヶ原(559)がみられるのみで、この詠歌は主題配列からすると名所歌・歌枕歌と捉えられる。

堀河百首の「野」における歌枕、地名は小野(1395・1396)宮城野(1398・1400・1404)あけ野の原(1399)嵯峨(1401)武蔵野(1402)猪名伏原(1403)岩手野(1405)粟津野(1406)布留野(1408)である。

1405 3197 地名を掛詞・縁語とした詠歌は1397・1405・1406の四首である。

1405 3197 梓弓いる野の草の深ければあさ行人の袖を露けき  
ともかくも人にはいはての野へにきて千種の花をひとりみる  
哉

1406 我せこかかりにのみくるあはつ野に鶉鳴也草かくれつゝ

1408 いにしへのふる野の道をたつねきて清水もむすひつる哉

1405 の入野は「射る」の掛詞で、梓弓は射るにかかる枕詞である。  
の岩手野は「言わで」に掛けてあり、1406の粟津野は「逢わず」の

掛詞で、「鳴く」に「泣く」が掛けている。1408の「布留野」は『万葉集』にみる地名で「経る」に掛け、しかも「いにしへ」の縁語としても用いられている。また、この歌は『古今集』886(『古今六帖』33768)を本歌とした詠歌である。

33768 886 いにしへの野中のし水ぬるけともとの心をしる人そくむ  
これらは地名に寄せた修辭技巧が目立っている。

次に、堀河百首成立以前の勅撰集にみられない歌枕、地名は1397入野、1399明野の原、1405岩手野があり、入野は『五代集歌枕』に国不審とあり、『万葉集』2277に詠歌がみられる。1399の明野の原が詠まれた歌は『平安歌和歌枕地名索引』にこの一首のみしかみえず、特殊な歌枕地名といえる。岩手野も同様に詠歌が少なく、堀河百首以後の私家集である『如願法師集』574(『私家集大成中世II』)にみえるのみで珍しい歌枕地名と言えらるう。

1399 月きよみ明の原の夕露にさゝめわけくる衣さぬれぬ  
野においては、修辭技巧としての地名が多くあり、出典を万葉に求めた地名や新奇の歌枕は数少ないと言える。

### 〈関〉

勅撰集の雑の部立において、関を主題とした詠歌は堀河百首成立以前の勅撰集にみられず、『新古今集』雑中に須磨の関(1598)不破の関(1599)の二首が歌枕名所歌の配列のなかに見出せる。

堀河百首の「関」で歌枕地名を詠じた歌は十六首中十四首で、それら歌枕を上げると次のようである。相坂の関(1410・1420)須磨の関

(1411・1416・1422)清見ヶ関(1421)砺波の関(1413)勿来の関(1414・1419・

1424)白川の関(1417・1423)衣の関(1418)川口の関(1421)である。これら

のうち、縁語及び掛詞として地名を用いた詠歌は1419・1420・1422・1423・1424であり、そのうちの1419・1420・1424の三首はいずれも「勿来」に「な

来そ」を掛けた恋愛歌である。

1419 なにしおは、勿来といふも我妹子に我てふこきはゆるせ関守  
1420 相坂は越にしものを今はたゝなこそその関の名こそつらけれ  
1424 恋わひて昨日もけふもこゆへきになこそその関を誰かすへけん  
1424 は『後撰集』恋二683小八条御息所の歌を出典したものと考えら  
れる。

683 たちよらばかげふむばかり近けれど誰か勿来の関をすえけん  
1422 において「須磨」は「澄む」に掛けており、1423は「白川」の縁  
語として「流れる」が用いられている。

1422 月影の明石の浦をみわたせば心はずまの関にとまりぬ  
1423 こえぬより思社やれ陸奥の名になかれたる白川の関  
これらの掛語・縁語はいずれも目新しい手法とは言えない。  
また、堀河百首以前の勅撰集に見られない歌枕、地名は砺波の関

・川口の関が上げられ、砺波の関は『万葉集』4085にみえる歌枕で、  
『古今集』1110(『今古六帖』33945)の歌を発想の典拠とし、万葉的詠歌  
に仕立てている。

1110 1413 いもか家にくもの振舞しるからんとなみの関をけふ越くれば  
わがせこがくべきよひささかにのくものふるまひかねてし  
るしも

1421 1421 川の川の関は『古今六帖』31905・31906に詠まれているのみで、これ  
らは『催馬楽』36河口を基としており、142もまたそこに発想が求め  
られるであろう。

36 1421 もる人もまたたえなくに川口の関のくきぬきはや朽にけり  
河口の 関の荒垣や 関の荒垣や 守れども はれ 守れど  
も 出でて我寝ぬや 出でて我寝ぬや 関の荒垣  
このように、「関」に詠じている歌枕地名は他の歌題に比べてそ

の種類が少なく、『万葉集』に出典を求められる地名も少ないこと  
が注目される。それは、勅撰集において主題として見られないこと  
から、新しい主題であることと関連して歌枕の数が少ないように思  
われる。

### △海路▽

勅撰集の雑の部立において、主題として海は見られるが堀河百首  
以前には海路を主題とした詠歌は見出せず、主題としても新しい。

歌枕、地名は武庫浦(141)淡路の瀬戸(142)伊良湖崎(143)淡路  
嶋絵島ヶ磯(144)猪名野の沖(147)求塚(148)奈良の浦(147)由良  
の門(145)大嶋(143)天の橋立(145)であり、歌枕に拠った詠歌は  
十首あり、その各々が違うものが詠み込まれている。これらのうち  
大嶋と天の橋立を除いた地名は堀河百首以前の勅撰集にはみられな  
いものである。

そのうちの武庫浦・奈良の浦・求塚は『万葉集』に詠まれている  
もので、147は『万葉集』巻十七407を引用し、1448は『万葉集』1801・1802  
・1809や『大和物語』147段にみえる菟原処女の伝説を典拠とした俊頼  
の詠歌である。

1441 かさはやの沖津塩さひ高くともいたてにはしれむこの浦まで  
1447 こしの海あゆの風吹なこのうらに舟はとゞめよなみ枕せん  
1448 もとめ塚おまへにかゝる柴舟のきたけになりぬよなる方をなみ  
また、伊良湖崎・絵島ヶ磯・由良の門は成立以前の勅撰集に詠歌  
はみられないが当代の歌人の私家集にその歌枕地名に拠った歌がみ  
られる。

1443 波のおるいらこか崎を出る舟は早こきわたせしまきもそする  
1444 淡路嶋絵島ヶ磯にあさりするたなゝし小舟いくよへぬらん  
1450 かけさかりゆらのと渡る柴舟のこきぎをくれたる歎きをそする

繪島は『散木奇歌集』814（『私家集大成中古Ⅱ』）に詠まれ、その詞書に「くたりさまに、あはちのゑしませ、面白と聞おきたる所也」とあり、当時には知られていた島と思われる。

814 思ひきやゑしま見し夜の曙にけふの明石の袖のけしきを

伊良湖崎は「堀河百首」1301（『千載集』1041・『顕季集』262）の顕季の詠歌や『江師集』50（『私家集大成中古Ⅱ』）などの詠歌にみられる。

1041 玉もかるいらこか崎のいはね松いく世までにか年のへぬらん  
50 あまのかるいらこかさきのなのりそのなのりもはてぬほとゝ  
きすかな

由良の門は『曾丹集』410にみえ、しかも145はこの歌を本歌とした詠歌である。また、『散木奇歌集』1287にも詠まれている。

410 ゆらのとをわたるふな人かちをたえ行ゑもしらぬこひのみち  
かな

1287 風をいたみゆらのとわたるしは舟のしはしこがれてよをすこ  
さはや

このように、堀河百首以前の勅撰集には詠まれていないが堀河百首詠出歌人の詠歌にみられることから、繪島ヶ磯・伊良湖崎・由良の門は当時において詠まれていた歌枕地名と言えらるる。

「海路」においての歌枕は堀河百首以前の勅撰集にみえない歌枕・地名が多数を占め、その中には『万葉集』を典拠とした地名も見えるが数は少ない。殊に、堀河百首と同時代に詠じられたものが見られるのは「海路」という歌題の新しさと無関係には考えられない。

以上のように、これらの歌題における歌枕地名は、堀河百首成立以前の勅撰集に見られない歌枕地名や『万葉集』を典拠としている地名が多数を占めていることが特徴と言えらるる。それらのうち、

「真弓山」「境川」「明野の原」「岩手野」のように『万葉集』や勅撰集に詠歌のみられないという特殊なものがある。また、勅撰集になく当時に詠まれた歌枕地名として「越の尾山」「伊良湖崎」「繪島ヶ磯」「由良の門」が上げられる。このように、『万葉集』を典拠とした地名のみでなく、特殊で新奇な歌枕や地名が求められている傾向が指摘される。

このようなことから、「山」「河」「野」「関」「橋」「海路」の六歌題においては歌枕及び地名が重要な位置を占めている。その点から、歌枕地名を歌み入れるべき歌題として選択されたと考えられる。しかも、堀河百首の四季の歌題配列は、ほぼ『古今集』以来の勅撰集の歌材・部立・配列にならったものと考えられ、雑の歌題においても同様に勅撰集の雑の部立の配列構成を基としていられる。『古今集』以来、歌枕や名所を主題とした配列が定着されていることから、これらの六歌題は歌枕歌・名所歌の題としての配列意識に拠って設定された歌題と推察できらるる。

（注1）久保田淳氏「藤原俊成の青年期の作品について」（『国語と国文学』昭41・1）、松野陽一氏「組題構成意識の確立と継承」（『文学・語学』昭49・1）、橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究本文研究編』を参照。

（注2）拙稿「堀河百首題『橋』をめぐって」（『文芸論叢』第16号）を参照。